

〈資料〉上代綾の織文の調査報告 (I)

—藤井有隣館所蔵裂について—

藤井守一, 広田輝次, 千賀武男, 植田博子, 白石裕子

Study on the Weave Design of Ancient Cloth of Japan. (Part I)

SHUICHI FUJII, TERUJI HIROTA, TAKEO SENG, HIROKO UEDA AND YUKO SHIRAIISHI

はじめに

現在, 衣料用素材として市場にあるものはきわめて多い。さらに新しい製品をもとめてその種類を増している。しかし, 他面我々が過去をふりかえって, かつて用いた染織品を再検討しようとする動きも見逃がすことができない。我国においては, 数多くの秀れた製品が少なからず残されており, これらについてその特徴を明らかにすることは, 今後の製品開発のためにきわめて重要なことであると思われる。

ここでは古代の製品のうち比較的多く残されている平綾地を, 京都の藤井有隣館所蔵裂のうちよりえらび, 主として組織についての特徴について検討を行った。

これらの裂が, 日本人の手になるものか渡来品かを区別して扱わなかった。一々について本文の組織と文様構成の精粗から, 他日その確認を期待できるからである。

1. 上代綾について

日本における織物は, 古代, 中世においては自然的, 地理的条件から大陸ことに中国から多くの寄与を受けてきた。三世紀ごろからは近隣諸国との修交の活発化にもなって, 高級な織物の輸入や養蚕, 染色の技術者の渡来も多くなっている。織物技術についても, 三世紀から五世紀の間に綾や錦の新技法の導入が行われたものと思われる。¹⁾七世紀に入り遣隋使及び遣唐使の派遣によって, 中国より直接高級織物やその技術者の移入は一層はげしかったと考えられる。²⁾これは日本の飛鳥, 奈良時代にあたり, 染織の技術ばかりでなく国家体制の基本をなす律令制の移植は, 織物の生産機構を整備し, 技術指導を行い, あるいは秀れた技術者を保護奨励することによって, 染織の発展にも大きな影響を及ぼした。すなわち, 養老令によれば, 大蔵省に織部司, 縫部司が置かれ,

また宮内省には内染司が置かれていた。このうち織部司は専ら錦・綾の製作に従事し, 和銅年間に至っては桃文師が諸国に派遣され, その技術は中央から地方へも伝えられた。³⁾

これら上代の染織については, 正倉院裂や法隆寺裂によって, その製造技法が高度な水準にまで達していたことが知られる。ことに, 正倉院裂は整理されたものだけでもその裂数がおよそ十数万点に達しており, 渡来品を含めてその種類の多様性, 技法の優秀性は, 世界染織史上でも特異な価値をもっている。

上代の綾は⁴⁾原則として後染めで, 経糸と緯糸の浮沈を変えることによって地と文様を異組織とした組織物を指している。⁵⁾その技法は平地に僅かな糸を浮かした素朴なものから, 綾地に大型文様を綾文で織り出した華麗なものまでに及ぶ。この上代綾の組織の上から, 次の六種類に分けられる。⁶⁾

「平地浮文綾」 平組織の地に経の三越浮き, 五越浮き, あるいは七越浮きを単独または併用して文様を表したものの。

「平地綾文綾」 平地に三越浮いて一越沈む経の四枚綾で文様部分を埋めたものの。

「平地変り綾文綾」 平地綾文綾の一変形で五越あるいは八越を単位として文様を表わしたものの。

「綾地綾文綾」 経四枚綾の地に緯の四枚綾で文様を表わしたもので, 「綾地異向綾文綾」と「綾地同向綾文綾」に分けられる。

「綾地浮文綾」 地を経三枚綾とし, 緯糸を長く浮かせて文様を表現したもので, これは綾地同向綾文綾とともに後世的な技法である。

2. 有隣館所蔵綾裂についての調査

表-1

1. 裂名称	2. 組織または文様名	3. 色名			4. 打込数	
		①マンセル記号	②慣用色名	③系統色名	タテ糸 本/cm	ヨコ糸 越/cm
(1) 平地山形文緑綾	山形様綾文	2,5 GY 5,4/4,4	ひわ色	オリーブグリーン	48	24
(2) 平地山形文黄緑綾	山形様綾文	10 GY 6,5/1	せい 青 色	濃い黄緑	35	47
(3) 平地山形文茶綾	山形様綾文	7,5 YR 5,6/6	か 樺 色	浅い黄茶	50	20
(4) 平地山形文緑綾	山形様綾文	2,5 GY 5,4/4,4	ひわ色	オリーブグリーン	40	30
(5) よろけ文緋綾	よろけ文	5 R 3,6/7,7	あ 緋	濃い黄味の赤	52	31
(6) 平地菱文くずれ文白綾	菱文くずれ文	10 YR 5/6		白	52	31
(7) 平地入子菱格子黄綾	入子菱格子文	5 Y 5,9/4,5	黄 つ 縁	オリーブイエロー	49	29
(8) 平地二重入菱格子文黄緑綾	二重入菱格子文	6,5 GY 5/5	も 萌 木	黄 緑	(糸密度 5:6)	
(9) 平地入子菱格子文茶綾	入子菱格子綾文	2,5 Y 6,2/4	こ 香 いろ	金 色	49	22
(10) 平地亀甲つなぎ白綾	亀甲つなぎ文	10 YR 7/6		白	52	26

1) 調査方法

有鄰館所蔵の上代裂の類裂は、その多くが断片で、ガラス挟みに表装されている。また絹の脆化の極限は六百年といわれるので、取扱いによる破損を懸念して組織の写真撮影を行い、その拡大写真から組織を調べることにした。ここでまず問題となるのは、裂の表裏、経緯の識別である。表裏については、表装段階において光沢の美しい面を表として扱ったであろうと考え、現在表側となっている面を一応表とした。また裂の経緯についても織耳などがいないため識別しがたいので、密度の細かい方、あるいは経筋のみられる方を経方向とみなすことにした。

拡大写真より綾組織をセクションペーパーに復元したが、セクションペーパーのタテとヨコの割合をできる限り糸密度に合わせて、文様が間延びしないようにした。また文様を分り易く、簡略化するために、文様部分の綾の浮糸だけを黒く塗りつぶし、地の組織の経は着色しない方法をとった。組織要領図とともに添えた綜統装置説明図は、現在ある手織機で織ることを考えて描いたもので、これに関しては既に沢田むつ代氏の研究がある。⁴⁾しかし、当時もこのような方法で織ったという確証はなく、手織機による一方法を示したにすぎない。(これによると、踏木を踏むことによって経糸は沈み、織前での上面が表となる織表で織り上げてゆくことになる。現在行われている一般的な織り方では織裏のものが大部分で、この方が織表で織るより製織中にあっての傷が少ない。しかし、織表で織った方が文様を織る過程がよく判るため、上代では複雑な文様などは織表として織られたと思われる。)

最後に試料綾裂について、色と文様から名称を求めた。名称はすでに整理の段階において一応与えられている

もので示したが、今回の調査によって、これを訂正すべきものが少なくなかった。文様名については現存の正倉院裂や法隆寺裂の名称あるいは従来の慣用の呼び方を参考として、できるだけ適切な名称をつけるようにした。またその色名は現在の織物の色調をもとに視感比色法で産業色票⁷⁾よりマンセル記号を求めた。さらにこの色票より「草木染日本の色」を参照し、和名の慣用名を調べこれを裂の色名に用いることとした。¹⁷⁾同様にハーモ



図-1 平地山形文緑綾

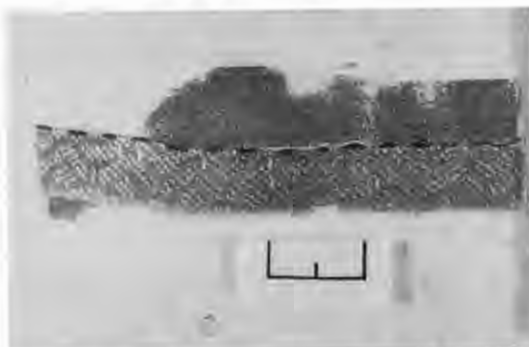


図-2 平地山形文黄緑綾

ニックカード¹⁸⁾よりJ I Sの系統色名を求めた。とくに
変褪色があったと推定される白色については、現在の色
をマンセル記号による表示はしてあるが、裂の名称とし
ては白綾とした。試料裂の種類は26種であるが、このうち
本報においては10試料のみについてのべる。

3. 測定結果と考察

1) 平地山形文緑綾、平地山形文黄緑綾、平地山形
文茶綾、三試料についての外観を図-1, 2, 3に組織、
修正図および綜統と踏木の結び方を図-4, 5, 6, 7
に示す。

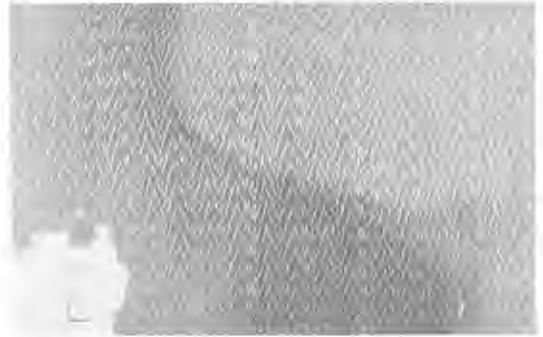


図-3 平地山形文茶綾

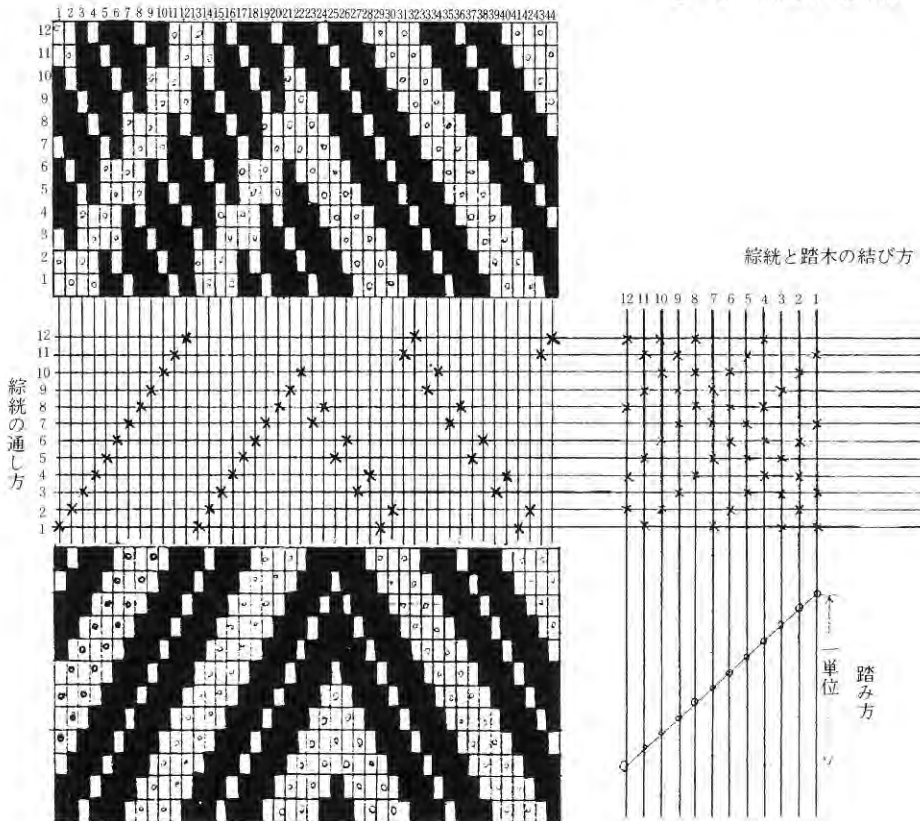
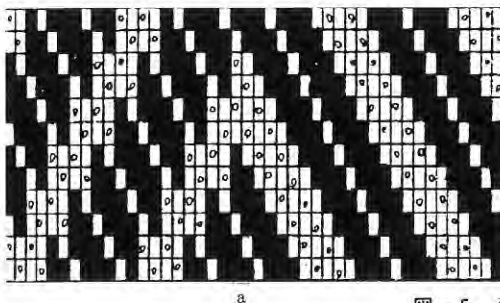
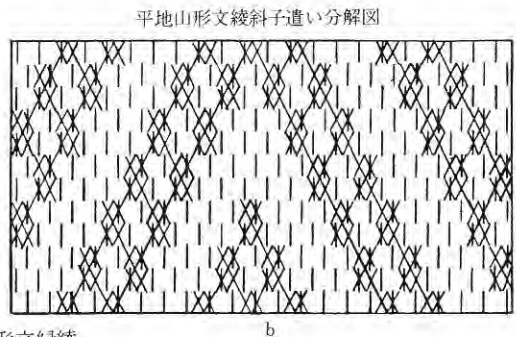


図-4 平地山形文緑綾

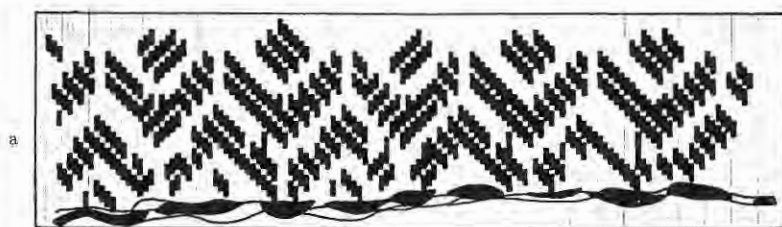


a

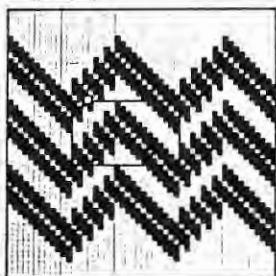


b

図-5 平地山形文緑綾



12 〈修正図〉

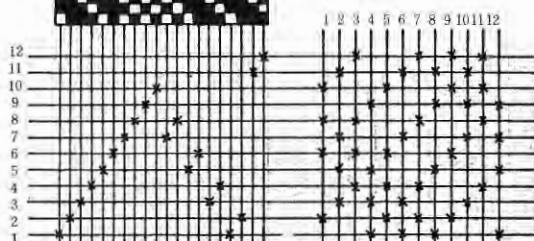


20

通し番号 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



綜統と踏木の結び方



綜統の通し方

踏木の踏み方

c 〈綜統と踏木の関連〉



a

〈修正図〉

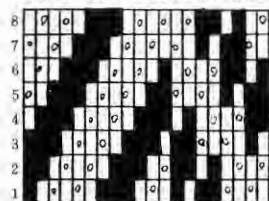


b

図一6 平地山形文黄緑綾組織要領図

〈一単位〉

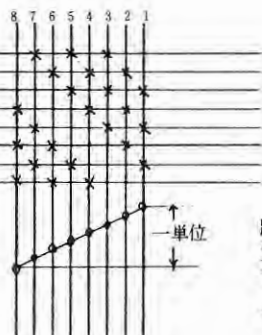
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



綜統と踏木の結び方

綜統の通し方

〔綜統と踏木の関連〕



踏み方
↓

図一7 平地山形文茶綾

今、三試料の組織は、地は平組織、文様は経の四枚綾組織で山形文を表わしている。すなわち、平地に緯三越にわたる浮糸で簡単な文様を織り出しているのであるが、この緯三越の浮糸を斜めに連続されることによって、図-4-eに示すように経四枚綾調の斜線、いわゆる山形文が現われる。この綾組織の流れの方向は変えないで、斜線の方だけを転換されると、少し異なった山形となる。つまり、緯綾について言えば、左流れの斜線は、織物の斜線としては、滑らかに織り表されているが、右流れの方は、鋸歯風に入出入りのある線となって現われてくるので、この右流れの線の在り方から、この文様はいわゆる四本バツリで織られていることを知ることができる。

さらにこの組織を平組織と斜子との組合わせの関係において考えてみたい。すなわち、地緯によって、地は平組織に開口しながら、他方では、文緯によって斜子風に経二本、緯二越を組とした糸遣いの要素で、順次左右両流れの斜線となるべき経の引き上げを加味して行くという操作を行なえば、結果として一方の斜線は糸バツリと同様滑らかに流れるが、他方のものは鋸歯風に歪んでくる。この技法によった歪を図示すると図-5-bのようになる。これは、↑印を地の平組織の為に引き上げられた経とし、×印をこれに加味されるところの、斜子遣いに引き上げられて斜線となる経とし、これら両者と組合せた図である。この図より、左流れの斜線は滑らかであり、右流れの斜線は乱れている理由は明らかになる。

平地綾文綾の場合は、浮文に見られるような浮糸のわたりが長い為に生じる裂面の乱れを起こさず、経糸の浮きが整っているので、浮文には見られない落ち着いた風格を示し、絹糸の持つ光沢を示している。

(1)緯綾の裂の文様のくずれの部分を修正した完全組織を手織で織る場合を考えると、図-4-aのような説明図ができる。文様一単位は、経44本、緯12越である。そこで、まず仮に経糸へ便宜上の通し番号を付けて、一文様をはっきりさせておいてから、綜統の通し方を考えてみる。通し番号1は1枚目の綜統へ、その2は2枚目、その3は3枚目の綜統へと図に示す順序で経糸を1本づつ通せばよい。これを織り幅に従って行なう。また、綜統と踏木の結び方は、第一番目の踏木に1枚目と3枚目と7枚目と11枚目の綜統を結ぶ。2番目には、2枚目と4枚目と6枚目と10枚目の綜統を結ぶ。このようにして、機を準備して、緯糸と交錯させて緯糸を打ち込むのであるが、そのためには、踏木を踏んで経糸を上げ下げする。このとき踏木を踏む順序も一定しておく必要がある。この場合は、最初は1番目の踏木次に2番目、3番目、……12番目というように踏んでゆけば、織表で織ること

ができる。この踏み方を一単位として、これを繰り返して緯糸を打ち込んでいけば、この平地山形文を作ることができる。

2)黄緯綾、3)茶綾も(1)緯綾の平地山形文綾の分類に入る。(2)黄緯綾の一単位は、経20本、緯12越で、右流れの方に鋸歯風の階段的斜線がみられ、これも糸バツリで織られてあることが明白である。織り方説明図は図-6-cで示す通りであるが、この組織図にみられる文様部分のくずれは、踏木の踏み方はまちがいにによるものであろう。

(3)茶綾は、階段的斜線が二本バツリの左流れで、これも規則正しい文様くずれが見られる。測定される修正図は図-7-bのようになり、一単位は経8本緯20越である。

註

四本バツリ：右の斜線の階段的推移が相隣る経四本を単位としてなされるもので、その数が多くなる程、階段的表出は何倍もの粗さになってくる。縦や横の直線以外の斜線や曲線は、直交する経と緯とに沿って階段状に刻み込まれて表出される刻み込みをバツリと称する平地山形文緯綾の外観を図-8に組織を図-9に示す。

これまでの綾は、経糸中心の経綾であったが、機織装置の操作からみて、綜統に通された経糸は常は引っ張られており、緊張し、もとの糸よりも多少細めに織り込まれて行く。当時は、経緯ともに同じ糸を使っていたので織られた裂を見ると、当然経糸の方が細く、緯糸の方はそのまゝなので太く見える。この点に着目して、緯糸で綾目を出すことが考えられたものと見ることができる。この方法で織り表わされたものがこの組織である。

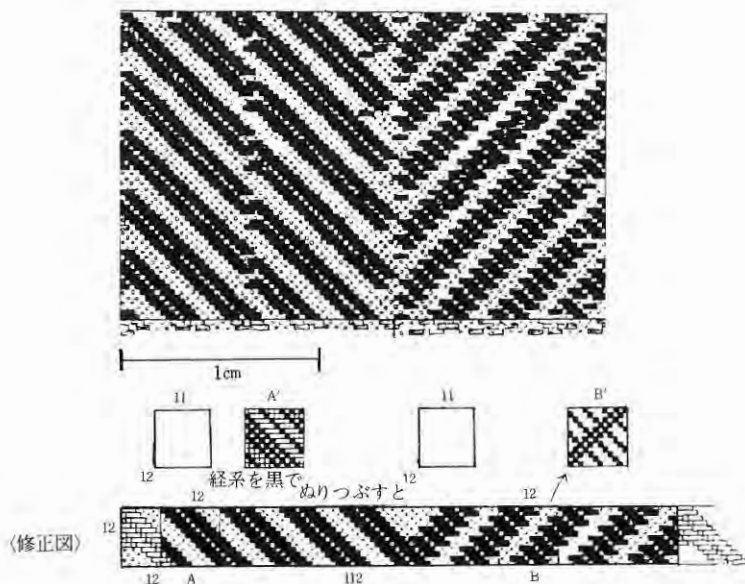
緯糸は織り込まれる時の緊張がないので、綾目が完全にはそろわないが、緯糸の方が太いため、綾目はよく出ることになる。現代では、そのような緯糸のゆるみをとばすためにテンターによる幅出し過程で横方向に伸長させている。

当時も緯綾用の幅出しを行なえば、一層綾目の美しさが生まれたであろう。この四枚綾が、平安朝になると五枚、七枚綾になり、最終的には、文様変化の最後の段階である綾地綾文綾の出現に至る。

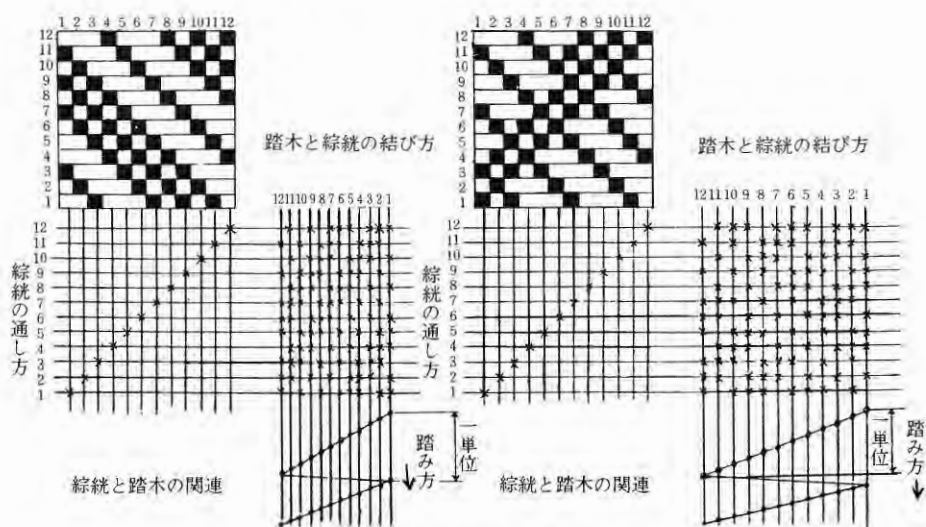
本綾は、緯四枚綾でやはり山形文を表わし、綾方向はすべて左流れであるが、前述の糸バツリによる鋸歯風階段的斜線に値する綾目を右流れ斜線にとっている。組織図は、図-9に示すようで、緯浮き糸を黒く表わしたものであるが、織り方法を説明のため、従来通りの経糸を黒く塗りつぶした図もA'およびB'として書き添えた。踏木と綜統の結び方は図-10に示すように複雑で、一本



図—8 平地山形文緑綾



図—9 平地山形文緑綾



図—10 平地山形文緑綾組織図



図-11 よろけ文緋綾



図-12 よろけ文緋綾

の踏木に多数の綜統を結ぶ必要はあるが、踏み順は簡単である。

5) よろけ文緋綾

外観を図-11、12組織を図-12に修正図と綜統と踏木の関連を図-13に示す。

この組織は、平地に緯三越または緯五越にわたる経浮が斜線上に流れているという簡単な文様である。しかし、綾の流れ方向は一定でなく、途中から何度も変わる。このような在り方は裂の随所に見られるもので、たとえば、図-12中、aと付けた所の綾の流れは、始めは左流れであるが、やがて右流れに変わり、次にまた左流れに、そしてまた右流れに、左流れにという調子に変化する。この同じ一本の流れを続けて追って行くと、これまでと同数の緯糸の幅について、e箇所からは始めは左流れ、次に右流れという二回の流れの変化で終わっている。果して、織匠がまちがえたのか、あるいは故意に意識してこのよ

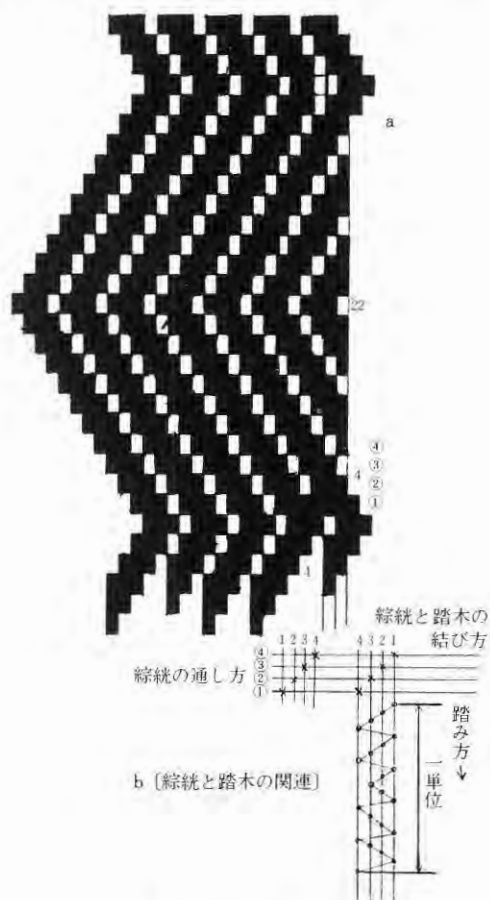


図-13 よろけ文緋綾組織図

うにしたのであろうか考えてみるに、これは、緯三越骨いて一越沈むという四枚綾の組織が基本になっていると推察できる。そうすると記号eの部分、経浮の長さが他と少し違っており、綾組織の食い違いができて、この部分から綾の流れが変わっている。つまり、裂全体を見まわして、織られた緯が五越の時には綾の流れ方向が変化するという事実が認められる。この事実から緯糸のある一定本数単位で、四枚綾組織の流れを変えて、縦の山形文、すなわち、よろけ文を基調としているのではないかと推定できる。そこで図-12のc、d、e等のくずれ部分を修正した組織を示した。

図-13の(修正図)がそれで経4本、緯22越で一文様となっている。

この裂の文様は一見してくずれ部分が多いが、これまで調べた文様組織や他の裂の文様と考え合わせて、くずれ部分を補なって、修正していくと連続文様がA、B二

種類推測されることを図-17、図-18に示す。

本裂の組織要領図図-16の記号aとbの各段に注目して見ると、図-17に示すような修正図Aができる。すなわち(5)よろけ文綾を基調とし、この一筋のよろけ文について緯22越を単位とし、その中央にハツリ目を作ると綾目がずれて、緯11越づつに分かれる。この二段文様の連続が本裂である。



図-14 平地菱文くづれ文白綾

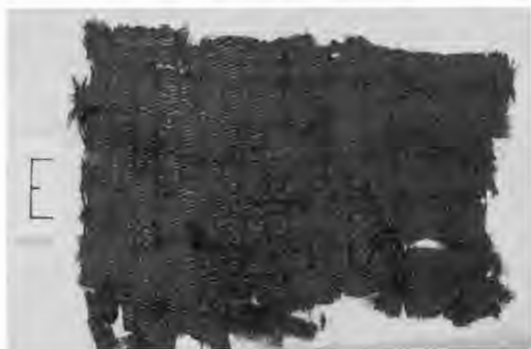


図-15 緋 綾

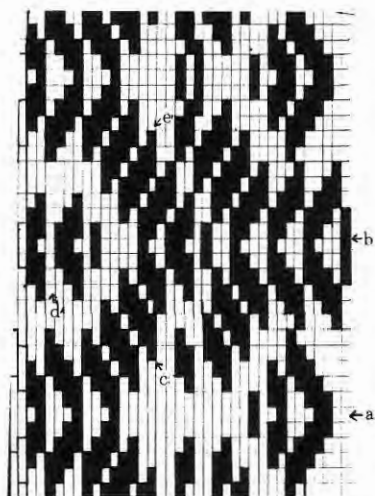


図-16 平地菱文くづれ文白綾組織図

6) 平地菱文くづれ文白綾および緋綾試料外観を図-14、図-15、組織図を 図-16、 図-17、 図-18に示す。

1) 文様部分であるべき所が平地に残っているのは踏み方を誤った為経浮きが出なかった所で、また図-16の記号c・eの部分は二越づつ踏み誤まった為くづれが生じたのであらうと思われる。ところが、綜統装置とその踏み方については、一単位の踏木の踏み方がかなり複雑である。当時の技術から推測して、踏み順がもっと簡単になる様な文様を考察していたのではないだろうか。この点から見ると修正図Aは適当でないように思われる。

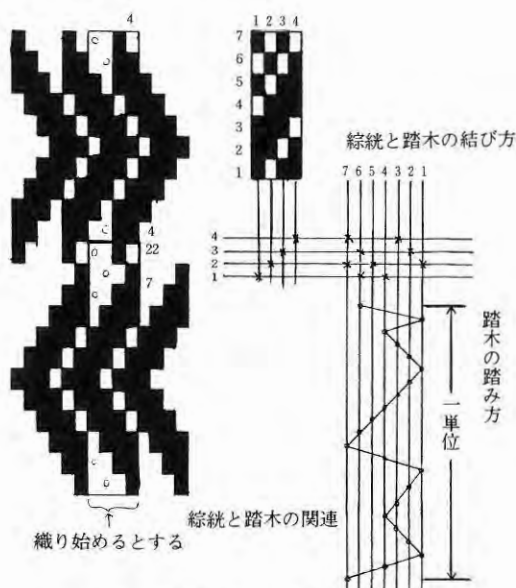


図-17 平地菱文くづれ文白綾修正図(A)

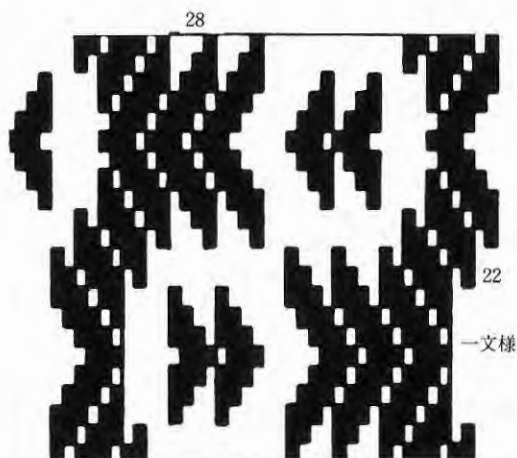


図-18 平地菱文くづれ白綾修正図(B)

そこで次にくずれ部分すなわち図-16の組織の記号c・d・eに注目して見ると、不完全ではあるが、縦菱文の連続をねらった文様であると考えられないだろうか。菱文の外側は左右上下のそれぞれの菱文の外側と共有し、内側は平組織で中央に経浮を置いている。綾の文様変化について調べてみると、山形文から綾流れ斜線の交叉により菱文・六角文・亀甲文へと移行してきたのであるが、この移行のちょうど途中で相当する文様が本裂の文様であろうと推測される。この考えに立てば修正図は図-18のようになる。従って、本裂を平地菱文くずれ文白綾と仮称しておきたい。

(7) 平地入子菱格子文黄綾

外観を図-19に、組織図と綜統と踏木の結び方を図-20に示す。

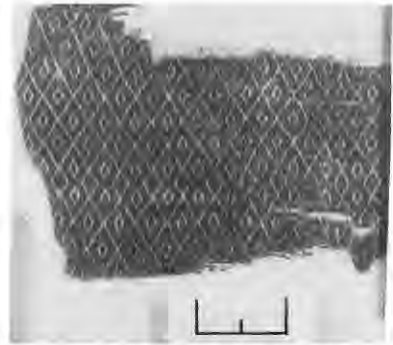


図-19 平地入子菱格子文黄綾

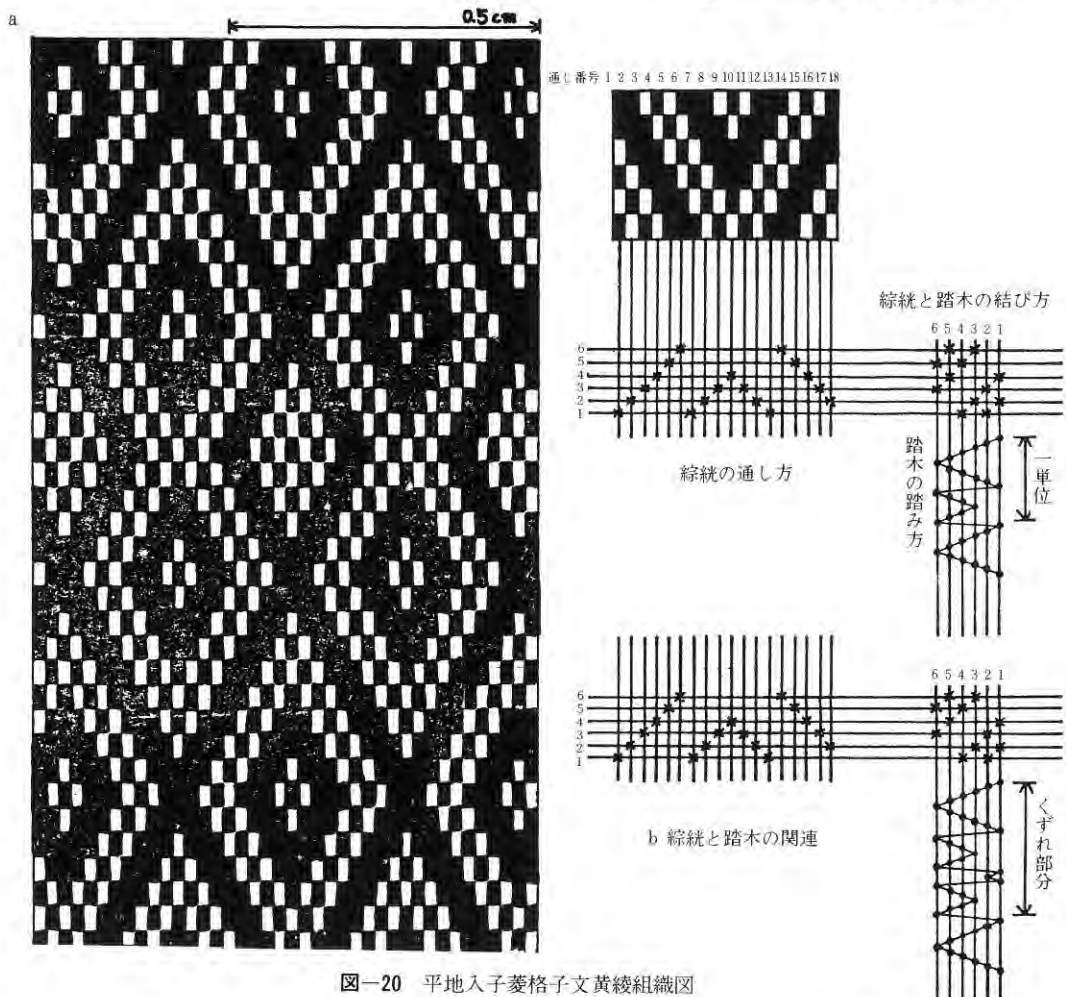


図-20 平地入子菱格子文黄綾組織図

多数の平行斜線を左右両流れに描き重ねると互いに交叉し合っ、自然に菱格子文ができる。これは四枚綾の浮糸の部分を次々と斜めに移動させ、途中で方向転換すると、6枚の綜統で織ることのできる山形文が生まれる

のであるが、この山形を逆に踏み返してみようとする考え方から生じたものと思われる。

本裂は、菱格子内に小菱のある、いわゆる入子菱格子文の裂であり、この菱格子の線の交叉部や入子菱の左右

の綾には、自然に緯5越にまたぐ経浮が生じてくる為、浮文と見なければならない。普通に入子菱格子文と言えば菱格子各内に小菱が含まれていると考えられるが、組織図においては全部が規則正しく連続して格子になっていないで、ある部分は菱つなぎになり、途中から菱が崩れている。崩れていない正常部分の入子菱格子は、経緯ともに18筋を単位とした左右・上下対称の文様であることから、この一単位の文様の織り出し法を考えてみれば、くずれが何故起ったのか判明できる。まず一文様織り出すにあたって、始めは順序よく踏木を操作していたのであるが次の段階で一廻りしないうちに引き返して踏んでしまうとくずれが生じる。つまり踏木を踏む回数が不足した為に起る現象と見る事ができる。このくずれ部分は、一見複雑に見えるが、実は緯が8越分不足しているにすぎない。

(8) 平地二重菱入菱格子文黄緑綾

外観を図-21に組織と綜統と踏木の関係を図-22に示す。

先の裂は、菱格子内に小菱のある入子菱格子文であっ

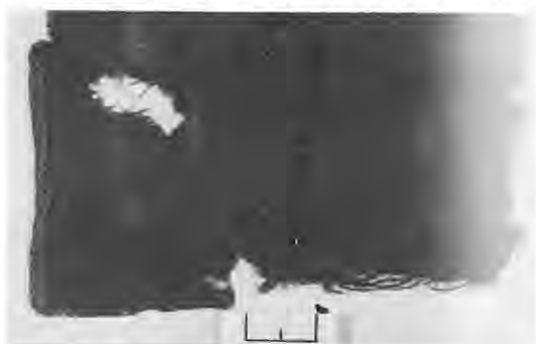


図-21 平地二重菱入格子文黄緑綾

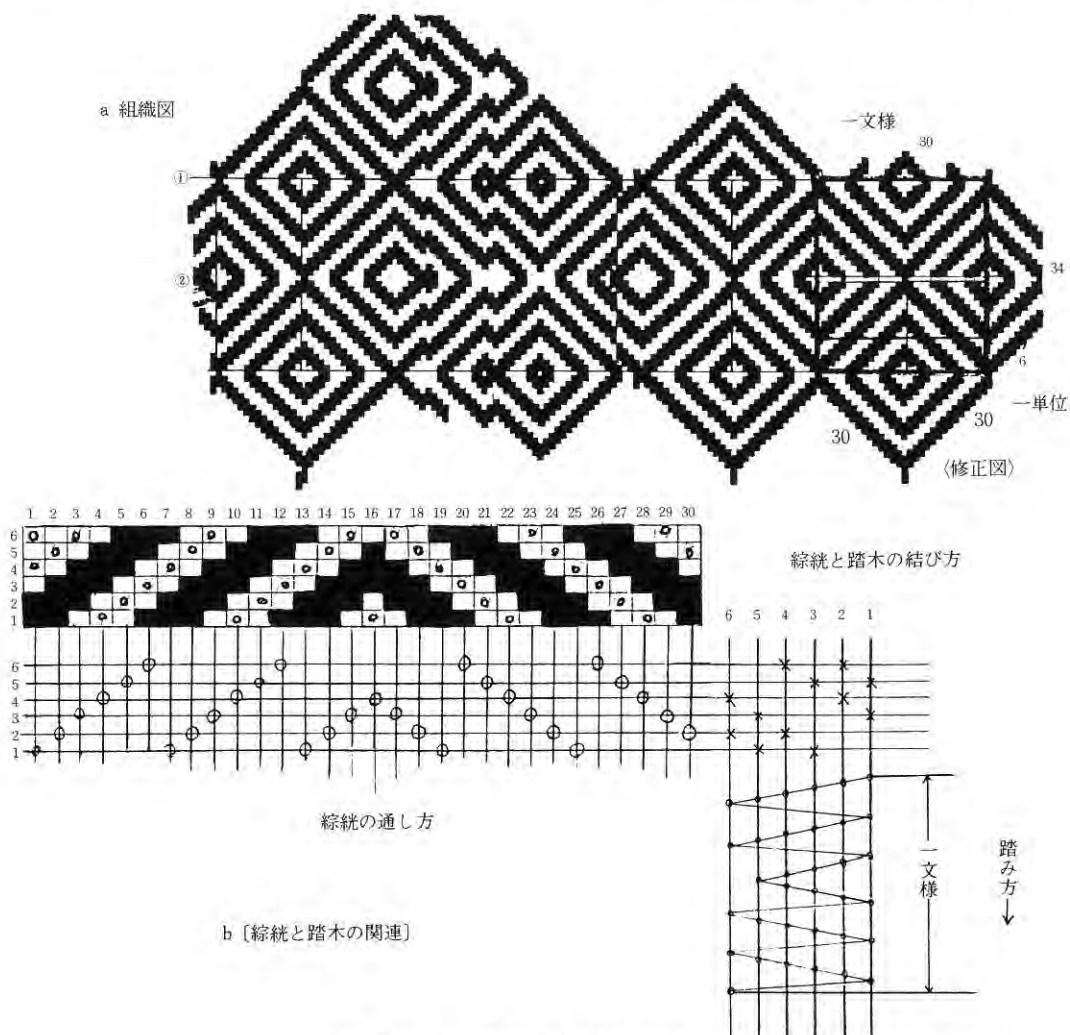


図-22 平地二重菱八菱格子子文黄緑綾

たが、本裂も菱格子文に分類され菱格子内に2個の小菱を持っている。そのため、この裂を二重菱入菱格子文と称したい。やはり、くずれ部分が見られ、くずれていない正常部分の二重菱入菱格子は、経30本、緯34越を単位とした左右・上下対称の文様である。

(9) 平地入子菱格子文茶綾

外観を図-23に組織と綜統と踏木の関連を図-24に示す。

本裂も文様から入子菱格子文に分類され、綾流れを見ると緯綾であることがわかる。先の(4)平地山形文緑綾で、緯糸について考察したように、太い緯糸で綾目を出しており、緯糸の緊張が少ないことから多少綾目のくずれが生じているのが認められる。これらの裂はガラス挟みされ、表装されている為、裏部分が見れないことは残念である。

菱格子の中の小菱が二種あるのは、平地と緯4枚綾の関係からハツリが生じる為で、当然のことである。くずれ部分を修正し、経浮きを黒く塗り表わした組織図より、綜統と踏木の間隔を考えると図-24-bのようになる。一文様は、経27本・緯51越で、20枚の綜統と26本の踏木を使って織ることができる。踏み方は、緯糸26番まで踏み、今度は逆の方向に踏み戻して行く。これは、緯糸26番を境として、上下対称の関係にあるからである。つまり上下打ち返しの操作となり、従って対称軸となる一越は、その一越で終点と始点を兼ねている。また図中AとBの筋について見た場合、BはAの左右対称になっている。もし文織装置である花機装置*によるものであるとしたなら、その懸けた紋軸に垂らしてある大通糸が、宇麻糸を通じて順次経糸に連絡されることになるのであるが、この宇麻糸が一窠間**を終えて次の窠間に移る時、今度は反対の順序で大通糸に連絡される形式の綜統を利用すれば、本裂に見られる様な左右対称の文様が織られることになる。この様な綜統は屏風綜統と呼ばれている。

〈注〉

*花機装置：文織装置の名称で、今のジャカード機以前のものの。単純な原理に基づいたもので、機台の上にいわゆる鳥居の様な枠を組み立てて、それに紋軸を懸けただけのものである。その紋軸には太絹糸すなわち大通糸が垂れてあり、それが宇麻糸を通じて順次経糸に連絡されることになる。大通糸には、太絹糸を以て所要の文様が文揚げされてあり順次一筋づつ繰って、文様になるよう区分された大通糸を引き寄せる時は、それにつながれている経糸が引き上げられて、文様

の為の杆道を開く。この大通糸を引き上げる作業を西陣では空引と呼んでいる。

**窠間：文様の裂幅における一繰り返しをいう。



図-23 平地入子菱格子文茶綾

(10) 平地亀甲つなぎ文白綾

外観を図-25に、組織を図-26に示す。

本裂は、六角形の亀甲文の連続であり、綾流れが変化する特定部分を見れば、経糸が緯5越をまたいでいる為、浮文の綾とみるべきである。文様組織を入念に調べていくと図-26に見られるように組織図上にA・Bの亀甲が見られ、Aの亀甲は真中が平組織となり、Bの亀甲はそれが浮糸となっている。文様はこの2種類であり、これらが交互に織り進められている。この文様の違いは、経糸の通し方とその本数の相異による。すなわち、Aの亀甲はBの亀甲より経糸が4本多い。こうした亀甲の真中を平組織にするとところと浮糸にするとところを作って、人為的に文様に変化を持たせたと考えることができなくもないが、当時の素朴さから考えて、やはりこれは同一亀甲文を連続させようとする当初の計画通り進まず、誤まりを生じたためであると推測する方が至当であろう。また、組織図において、記号aの部分を見ると部分的に緯7越の経浮になっているのではなく、横一列すべてにわたって経浮が続いている。おそらくこの箇所だけ地綜の処理を誤まって、経糸の沈むべきところを浮かせたからではないだろうか。

本裂は、発展の過程において見ると、前述の(8)平地二重菱入菱格子文菱の二重菱入菱格子文を縦方向に伸長した菱文の左右に少し手を加え、その菱文が六角形の亀甲文様となる。これに相当するものとして、平地亀甲つなぎ文綾と仮称する。

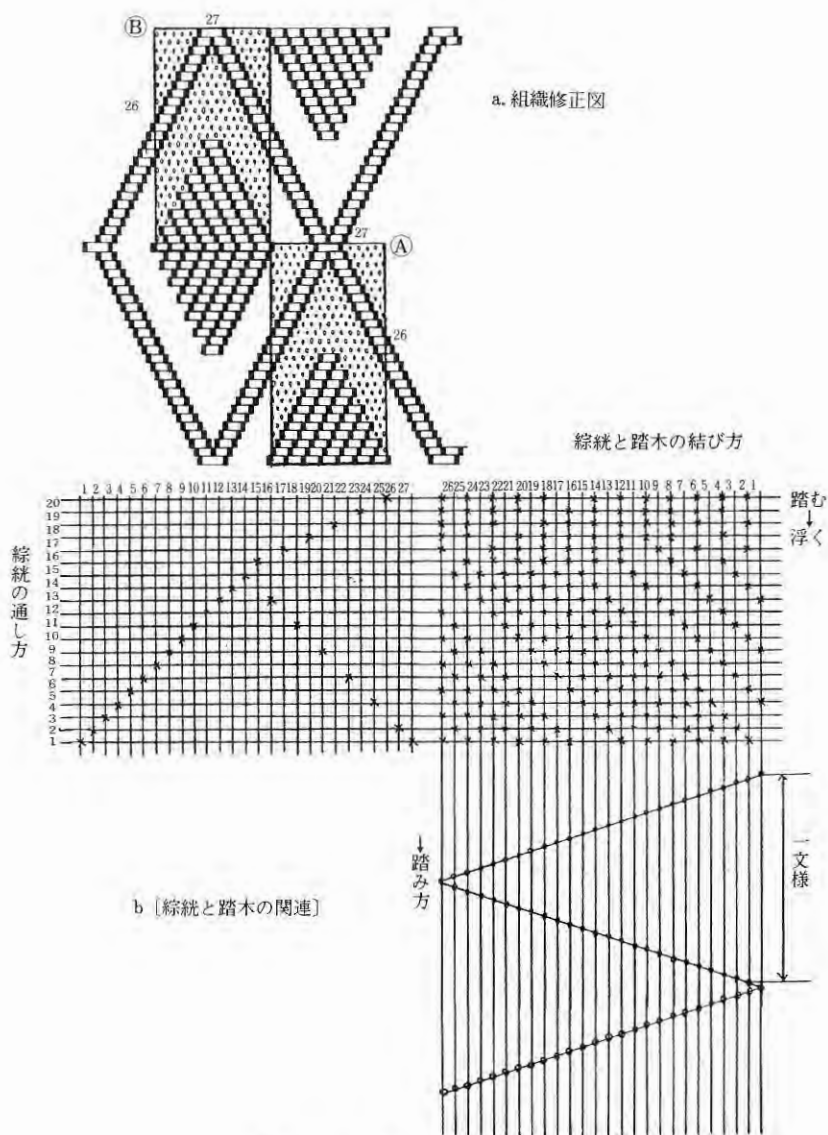


図-24 平地入子菱格子子文茶綾



図-25 平地亀甲つなぎ文白綾

総 括

上古における織物組織を藤井有鄰館所蔵の綾組織の裂について調査し、その組織の特徴について考察し、これら手織で製作する場合の綜統・踏木の操作についての推定を行った。

1) 山形文は三越の経浮糸を隣の経糸に順に連続されると斜線文様となるので、これを途中で方向を転換させて行うことができ、比較的初歩の技術段階の綾に多くみられた。

2) 山形文からよろけ文へまたは山形文の右および左流

れの斜線を平行させ、または交叉させることにより菱格子文さらに亀甲文へと次第に複雑な組織となるが、所蔵裂中にはこれらの組織を用い美しい文様を作っているものがある。

3) 文様は平地浮文綾、平地綾文綾、綾地綾文綾の順をたどって変化したものと考えられるが、平地浮文綾に山形文や菱格子のものがみうけられた。

文 献

- 1) 佐々木信三郎：日本上代織技の研究(第二報)，川島織物研究所報告
- 2) 佐々木信三郎：上代錦綾特異技法攷(第五報)，川島織物研究所報告
- 3) 佐々木信三郎：上代綾に見る斜子技法，川島織物研究所報告
- 4) 沢田むつ代：上代綾の織文について，東京国立博物館美術誌，MUSEUM271号，272号
- 5) 角山幸洋，日本染織発達史
- 6) 遠藤元男：織物の日本史，日本放送出版協会
- 7) 山崎有樹，草木染日本の色
- 8) 産業色票，日本色彩社
- 9) ハーモニックカード，日本色彩研究所

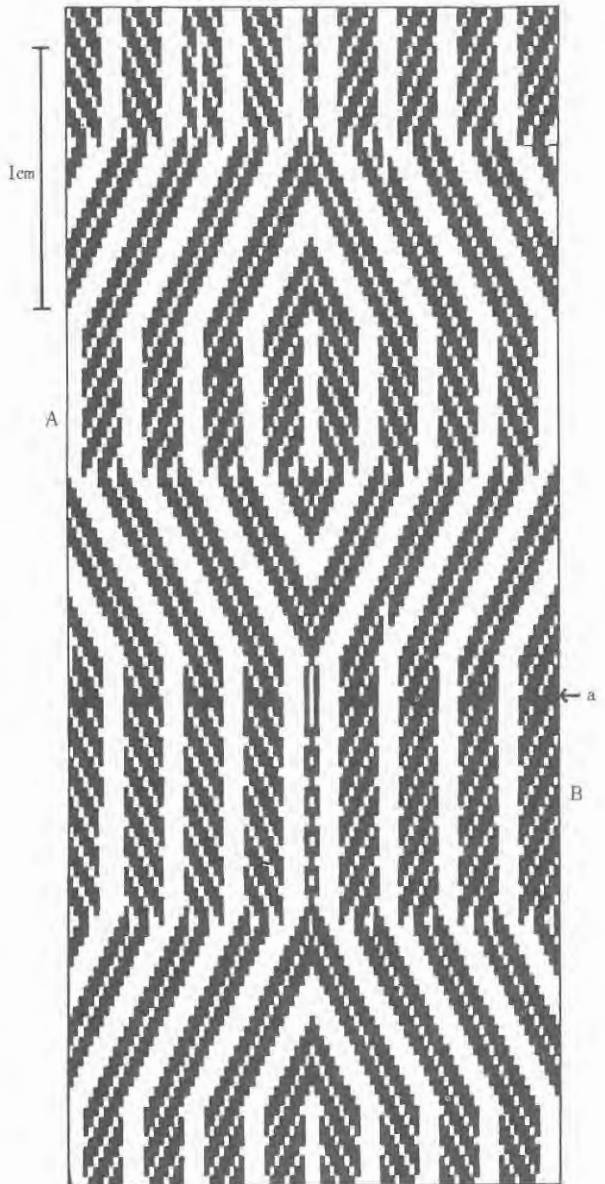


図-26 平地亀甲つなぎ文白綾組織図

Abstract

This report is on an investigation of old fabrics of Japan which are collections of Fujii-Yurinkan Museum in Kyoto. Many beautiful designs can be seen in them.

- 1) The Yamagata weave design (Zig-zug weave design) is used mostly in ornamental fabrics about a thousand years ago.
- 2) The Hishi-koshi and Kikko weave designs (Bird-eye Weave design) can be the modification of the Yamagata weave design. They all made many attractive patterns.
- 3) From the results of these investigations, we were able to estimate the weaving methods of these old fabrics.